初の独演会 両親に感謝

松山出身の落語家・林家染太

弟子入り猛反対「今では一番のファン」

天神天満劇場で初めての独演会を開いた林家染太＝大阪市北区天神橋2丁目

独演会終了後、「今では一番のファン」という両親と笑顔を見せる林家染太(中央)＝大阪市北区天神橋2丁目の天満天神繁昌亭

師匠の指導に舞台で涙々と頭を下げる林家染太（松山市出身）。それまでの誇り口とは打って変わり、こみ上げる思いにたどたどしさがにじむ。林家染丸師匠に入門し10年目。大阪市北区の落語定席「天満天神繁昌亭」で、初の独演会「染ちゃんの俺（おれ）色にソメタ！」を開いた。客席には落語界に入ることに猛反対だった父と母の姿があった。

客集めや興行すべてを自らが手掛ける独演会。会を1週間後に控えた染太は「清水の舞台から飛び降りる気持ちですわ」と話っていた。

中学生で生の落語に触れ、上方落語の本場に身を置くため、関西大に進んだ。両親には「学校の先生になる」とうそをついた。「実は毎日、寄席に通ってました」。落語研究会に入り、夢が膨らんでいたある日、異変に気づいた両親が大阪に来た。家族会議。「落語家になりたい」と切り出した。

地元に戻り、教師になると信じていた愛媛大教授の父荻山博之さん(65)は「家の敷居はまたがさん」と怒った。母博子さん(60)は「卒業証書と教員免許を持ってきなさい」とけじめを求めた。

博之さんが繰り返す。「本心を聞き、混乱し、反対した。アマとプロでは全く違うんだと。その後、気持ちの整理をつけるのに時間がかかりました」

両親との約束を果たし、芸と人柄にほれ込んでいた染丸師匠に弟子入りした。3年間の修業生活。掃除、洗濯、運転手。「2台乗車にしたりバカラのグラスを割ったり。迷惑ばかりかけたけど、貴重な時間でした」

その後の生活は苦しく飯が食えないときもあった。「両親が必ず金してくれた。あのサポートがなかったら、今の自分はないと思う」

「英語落語」の芸を身に付け、ニューヨークやロンドンなどで公演した。三味線の腕も磨いた。松山北高の先輩の厚意で設けた月1回の「荻弟寄席」を53回重ねてきた。全力を独演会に注いだ。

幕が上がる。軽妙な語り口で観客を引き込む。大柄な体を存分に生かしたしぐさ、おにぎりをほおばる姿は観客をうならせる。三味線も披露した。最後は「師匠が大事にしている」という落語「蛙茶屋」で締めた。

「落語家になりたくて松山から出てきて、独演会をできるようになりました。皆さんのおかげです」。涙ぐむ染太に「頑張れよ」の声援が飛び打つ。

反対はしたが、「一番のファン」（染丸）となった両親。博之さんは「やっとものになった」と胸をなで下ろし、博子さんも「お客さんに育てもらっている。いい独演会になった」と話った。

林家染太、34歳。「芸の世界は死ぬまで勉強。夢は英語落語で世界ツアー」